

本興寺だより

令和三年
四月
第二〇号

一人(仏弟子)は必ず四つの恩を知ってその恩を報ずるべし」(宗祖・開目鈔)

桜前線が例年より早く北上しています。桜が咲くと春を実感します。草木は何処で季節を感じ、毎年規則正しい開花や実りを結ぶのでしょうか？

新芽が息吹いてからの時間の長さか？寒暖の温度さか？或いは日照や雨風の注ぐ量か？毎年見る光景ではありませんが、考えてみると不思議なものです。

自然界には、万物に秩序と作用を知らせる眼に見えない不思議な力が、命に働いていることが実感されません。万物の命の頂点にいるのが人間です。

草木の生命力の源は全て地中の根にあります。根が枯ればその命は失われます。根から芽が出て葉を広げ、花を咲かせ実をつけます。根がそれぞれの時期を知り己を輝かす力を持っているからでしょう。

人間の命、生き方も同じです。肉体の内側に、土中の根と同じように外からは見えない心があります。草木の勢いが衰えれば、その原因が根にないかをまず考

え、水や肥料を施しますが、人は苦悩を体験した時、その誘因が心の中に潜んでいることに中々気付けないのです。それ故、その原因を内なる心に求めず、今までの自分の生き方、考え方を見直そうとは思わないと云われます。

「人間は万物の霊長である」とは、中国の古典である「書経」にある言葉ですが、人間はあらゆる生き物の中で、高い精神性と霊妙しい人智では計り知れない尊さを備えているからです。また「人間は考える葦である」とも言われます。フランスの哲学者であり数学者のパスカルの言葉ですが、人間は葦(あし)水辺に群生する背丈の高い草)のように、自然の中でか弱い存在ではあるが、知識や経験をもとに思考する存在として偉大さを持っているのです。



人は豊かな心と精神性を持った時、「万物の霊長」とも「考える葦」ともなり得るのである。

豊かな心を保つとは、自身の心の内を常に見つめ、孤独に陥りがちな独善の心を除き、自分で生きる力の影に、己が生かされている力の存在に気付く、その恩に感謝の気持ちを持たないことだと示されています。日蓮聖人は冒頭の文のように、人は必ず四恩を知りそれを報じる生き方を忘れるなど云われます。

四つの恩とは、①命を与えてくれた親・ご先祖の恩 ②人生で色々教え導いてくれた師をはじめ他人から受けた恩 ③国土や環境から受ける恩 ④全ての人に救済の道を説かれ、我々の命の源であるご本仏(神仏)の恩です。これらの恩を我が心に深く留めて生きよと云われています。そして

「かけた情けは水に流せ。受けた恩は石に刻め」を指針とせよということです。人は得てして、他人にかけた情けは石に刻むように何時までも忘れず、受けた恩は、喉元過ぎれば熱さを忘れるように、水に流して忘れてしまおうのです。

人間は、心の奥底に魂の心があると云われます。肉体と脳は老化していくので、興味や関心のないことは記憶が薄れていきます。人の名前が出てこない昨日何を食べた?となります。しかし他人から褒められたこと、或いは貶(けな)されたことは何年経っても忘れません。

人は、良いことでも嫌な事でも魂まで深く達した記憶は忘れないものです。受けた恩を心魂に留めた生き方をしなさいと説かれています。これができるのは人間だけなのです。

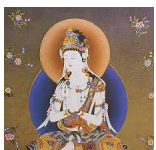
親が子供の面倒をみて育てるのはどんな動物にもできることができます。しかし成長した子どもが、年老いた親の世話するのは人間だけなのです。

人間の世界でも最近では、親に生んで育ててもらって

一人前になったら鳥のようにさっさと飛び立ってしまつて親の事を見向きもしない人が増えています。

人は単なる動物ではなく、仏様の命をもらっている霊長なのです。

恩という字は感謝の気持ちを表わしている字です。恩を知るとは、単にその意味を知ることではなく、感謝の気持ちを魂に染まらせて生きていくことだといわれます。命は感謝と思いやりの気持ちの中で魂が育てられていくのです。恩に報いるとは受けた恩を忘れず返していく生き方なのです。



日常の挨拶である「ありがとう」や「すみません」の言葉には感謝と謙虚さが含まれています。草木の成長と実りの源が根にあるように、人の繁栄と幸せは心の根を深く広く育てられるか、なのです。

コロナウイルス感染の拡大が止まず、長く社会全体が辛抱の時世ですが、コロナで少しも影響を受けない人はほとんどいないでしょう。事業の倒産や業績不振、解雇など、社会が日頃如何に多くの人々のつながり、支え合いの中で成り立っていたかを改めて知らされた気がします。

人は一人では生きていないのです。沢山の人の思いやりが何時も注がれているのです。「お蔭様で」という言葉は、人の心(魂)が本来そのことに気付いているからなのです。合掌 本興寺住職 中谷 聰 秀